

いぐだたみ

県立長崎図書館だより

No. 161
2010年7月

長崎ゆかりの文学展

県立長崎図書館では、本県にゆかりのある作家や文学作品を中心に、「長崎ゆかりの文学展」として、年間4回の企画展と常設展を開催しています。毎年夏の企画展では「原爆文学」をテーマに展示しています。

■ 第2回企画展「原爆文学展」開催中

現在、4階郷土資料展示室で「原爆文学展」を開催しています。長崎市出身の芥川賞作家林京子氏を中心に、佐多稲子、福田須磨子、山田かん、竹山広、青来有一氏等の直筆原稿をはじめ本館の所蔵資料を展示紹介しています。

また、林氏とは県立長崎高女時代の同級生で、GHQの検閲により発禁となった『雅子斃れず』の著者である石田雅子氏の直筆原稿等も展示しています。開催期間は9月5日（日）までです。この機会にぜひご来館ください。



■ 常設展「シリーズ 長崎文学散歩」開催中



県内の文学碑や作品の舞台の写真と解説パネルや本館所蔵資料を展示し、長崎ゆかりの文学を「長崎文学散歩」としてシリーズで紹介します。

第1回目は、長崎市の山本健吉文学碑、中村三郎歌碑、向井去来句碑、諫早市の伊東静雄詩碑、島原市の宮崎康平の碑、佐世保市の吉田絃二郎歌碑、平戸市の吉井勇歌碑、鄭成功廟を紹介しています。今後も「シリーズ長崎文学散歩」では、県内各地から長崎の文学の豊かな香りをお届けします。

■ 第1回企画展「長崎の芥川賞作家たち～野呂邦暢（没後30年）を中心に～」好評のうちに終了

今年は本県初の芥川賞作家である野呂邦暢の没後30年にあたります。野呂の直筆原稿や遺品が寄贈された諫早市立諫早図書館、諫早市芸術文化連盟の協力を得て、貴重資料を展示しました。併せて、本県出身の芥川賞作家である森敦、林京子、村上龍、青来有一、吉田修一各氏の直筆資料等も紹介しました。国民読書年にふさわしく、多くの文学ファンにご来館いただき、読書への誘いにもなりました。



もくじ

- ◎ 長崎ゆかりの文学展企画展、常設展 P 1
- ◎ 長崎県立長崎図書館所蔵資料の紹介 P 2
- ◎ 第1回県立長崎図書館講座 P 2
- ◎ 第1回図書館実務研修会 P 2
- ◎ 県内図書館散歩 P 3
- ◎ 「龍馬伝の舞台幕末長崎」 P 3
- ◎ 文部科学省表彰団体の紹介 P 4
- ◎ 文化講演会 P 5
- ◎ 読書郵便集の取組紹介と作品募集 P 5
- ◎ 100年のあゆみ、行事案内 P 6



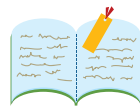
で
人
ココロおっこ



2010年は『国民読書年』

2010
国民読書年

長崎県立長崎図書館所蔵資料のご紹介



平成22年4月9日に作家の井上ひさし氏が亡くなりました。井上ひさし氏といいますと、本の重みで自宅の床がぬけ、それらの本を寄贈して故郷山形に「遅筆堂」という図書館が造られたという話や、50歳以上の世代なら「ひょこりひょうたん島」（山元護久との共作）を思い出す方もいらっしゃると思います。

井上氏は戯曲「父と暮せば」の前口上の中で、「私の一生はヒロシマ、ナガサキを書き終えたときに終わるだろう」と書いています。

広島が舞台の作品は「父と暮せば」のほかに「紙屋町さくらホテル」があり、長崎が舞台の作品は江戸時代の長崎を登場させた「表裏源内蛙合戦」があります。また昭和前期を舞台にした「きらめく星座—昭和オデオン堂物語」は主人公が長崎出身者という設定です。

井上氏は膨大な資料を調べに調べてから書く方だったと聞いています。この長崎人のモデルは実在したのか？もしそうだとしたら誰だったのか？というところが気になる作品でもあります。

上記でご紹介しました4作品、どれも笑い、そしてせつなくなるものばかりです。

当館ではその他多数の井上作品を所蔵していますので、たくさんのご利用をお待ちしています。

(※「父と暮せば」は英語版や中国語版、イタリア語版、ドイツ語版も所蔵しております。)



第1回 県立長崎図書館講座

長崎料理の真髄を堪能！

5月22日（土）本館講堂において、「龍馬が好んで食べた長崎料理とは？」と題して、長崎料理研究の第一人者である脇山順子氏と、「龍馬伝説カレー」をプロデュースした現代の名工・坂本洋司氏に対談していただきました。長崎の歴史に重なるようにして創り出されてきた国際色豊かな長崎の食文化、龍馬も食べたであろう長崎料理の真髄を語っていただきました。

受講者からも、「奥深い長崎料理を教えていただきありがとうございますでした。」「長崎の食文化が豊かなことを再確認することができました。」などの感想が寄せられ大変好評でした。本館では、毎年3回、県立長崎図書館講座を開催しています。どうぞお気軽にご参加ください。



第1回 図書館実務研修会

図書館職員が常に悩んでいることのひとつに、どのような図書を購入して住民の方に提供したらよいかということがあります。今年度第1回目の研修会では、さまざまな分野の中でも特に「科学読み物」に焦点を当て、選書時における図書館職員の資質向上の手助けになるようにと、科学読物研究会及び仮説実験授業研究会に所属されている西村寿雄氏を講師にお迎えしてご講義をいただきました。午前の部では、具体的に図書を紹介しながらその内容の講評（選書の際の視点）を行っていただき、また午後の部の科学体験では、講師の指導のもと、実際に参加者全員が様々な実験を行うことを通して、職員自ら「科学」を体験することができました。今回の研修で図書を選ぶ際には様々な視点があることを再認識し、「たのしく科学する」という視点を通して、選書や利用者の子どもたち等に還元できるものと考えます。



シリーズ 県内図書館散歩①

ー長崎市立図書館ー

県立長崎図書館では、県民の皆様が県内の図書館をより身近に親しみやすく感じていただき、最寄りの各市町立図書館を一層利用していただくため、「シリーズ県内図書館散歩」として、各市町立図書館を紹介していきます。

第1回目として「長崎市立図書館」をご紹介します。

「長崎市立図書館」は、ビジネス街の一画にあり、前面ガラスのカーテンウォールで緑を豊かに茂らせ、明るさと開放感を漂わせています。

図書館フロアは、1・2階が、約350の閲覧席と25万冊を収容する開架書架を備えたメインフロアとなっており、4階の自動閉架書庫は、55万冊の収容能力です。

1階は、ふれあいのフロアで、人気の高い図書を主題別に配架し、新聞や約500誌の雑誌、こどもとしょかんには6万冊を超える図書があります。2階は、学びのフロアで、専門的な図書や仕事に役立つ図書、長崎の地域資料、各種の辞典類をそろえ、ビジネスや調べもの、学習を支援しています。インターネットやデータベース用パソコンコーナーもあります。

また、長崎市内の図書室等とオンラインで結び、全56館の中心館として各種サービスを行っており、館内の生涯学習エリアの救護所メモリアルや貸室、スタディールーム等も含め、毎日、たくさんの方々が利用されています。



シリーズ「大河ドラマ『龍馬伝』の舞台 幕末長崎」①

ー幕末長崎貿易のしくみー

いよいよ7月18日の放送から「龍馬伝」は長崎に舞台を移しました。幕末の長崎を背景に、ドラマはどのような展開をみせるのでしょうか？

そこで今回は、龍馬たちがT・B・グラバーからライフル銃や蒸気船「ユニオム」を購入したこと、岩崎弥太郎（土佐商会）が樟脳をW・J・オールトラに売り込んだ、等々の事実に関連して、幕末貿易のしくみの一端をご紹介します。次回は丸山花街と決めています、3回目は何にしましょうか。

さて、鎖国時代の唐蘭貿易は長崎会所の管理下にありましたが、龍馬が長崎に出入していたころの長崎（居留地）貿易は運上所を中心に行われていました。その場所は俵物役所の敷地（現十八銀行本店）から慶応二年（1866）には梅ヶ崎に移転しました。現在の長崎市民病院のところです。

高校の日本史では、幕末に結ばれた米英仏露蘭との通商条約は関税自主権がない不平等条約だと教えていますが、そう単純ではありません。もう少し具体的に述べると、日本からの輸出品は商品価格の5分（5%）を運上所に納めることになっていました。一方、外国商人からの輸入品にかかる運上（関税）は色々で、彼らが日用品として使う衣服・家財・書籍などは運上なし、家屋建設資材・食料品などは5分、酒類は3割5分、その他品々は2割と定められていました。なお、アヘンは厳禁です。こうしてみると、それほど日本側に不利というわけではなさそうです。外国人商人が不当に安い価格を申告してきた場合は、運上所で値上げ増税もできました。

この後欧米諸国は、長崎・横浜・函館に続いて開港することになっていた兵庫（神戸）・新潟が開港されないという違約を幕府に迫って、見返りに運上の引き下げを承諾させました。これが慶応二年の「改税約書」で、この結果運上は一律5分、さらにその時々々の価格に課税する従価税方式ではなく、商品一律の従量税ということになったのです。日本の国益に反することはいうまでもありません。

龍馬を中心に作成されたと伝えられる「船中八策」の最後の条項に「金銀物貨宜シク外国ト平均ノ法ヲ設クベキ事」とありますが、これは、外国商人に有利に改定された貿易仕法の改革をうたったものです。

「龍馬伝」において、こうした貿易のしくみが、どこまで具体的に取り上げられるのでしょうか。まあ、無理でしょうね。私たちは福山龍馬が長崎を舞台に活躍する姿を楽しみましょう。



寄稿者

長崎県参与 本馬貞夫氏

文部科学省表彰団体の紹介

◎ 読書ボランティアグループ「愛のおはなしの部屋」（雲仙市）

今年は12名のメンバーで活動しています。雲仙市愛野町で、平成9年に立ち上げ、今年で14年目に入り、感慨深いものを感じています。

発足のきっかけは、愛野町の教育委員会に、講座や研修会を開催していただき、仲間が集い、子どもにやさしく、温かい、絵本の読みかたりや朗読を、心に届けていきたいという願いで始めました。

子どもの悲惨な事件が発生する中で、文部省（当時）、長崎県は、学校での朝の時間や、家庭での「10分間読書」に力を注ぎ、また、県に子ども未来課ができ、ボランティアの読み聞かせの必要性を広めていました。そういう中で私達は、年間計画を立てて、保育園、幼稚園、小学校、中学校へ出向いたり、毎月、公民館で愛のおはなしの部屋を続けてきました。また、今は、町内外のイベントや、他町の学校へ出向くこともあり、福祉関係や、子どもの行事でのお誘いなどもあります。

いかに、一人ひとりの子どもに深く感じてもらえるかが、私たちの考える大切なことだと思いつながら、年間、70～80回（のべ6,000人ほど）実施しています。それも毎回、より良いものにしたいということで、黒子に徹した読みが出来るよう練習を積み重ね続けています。

そういうことを評価していただいたのか、「平成22年度文部科学大臣賞」をいただき、思いがけないことで本当にびっくりいたしました。この事を、良い機会と捉えて、子どもにとって、より良い愛のある読み語りができるよう、メンバー一同、心を引き締めていきたいと思ひます。



「愛のおはなしの部屋」

◎ 地域の子供達と歩み続ける図書館へ（南島原市有家図書館）

有家図書館は、平成9年、小規模ながらも住民の大きな期待を受け開館しました。そのため、「地域に根ざした身近で親しみのある図書館づくり」に取り組んでまいりました。

子ども達が楽しみながら参加できる「としょかんDeクイズ・くいず」や、月2回の「おはなし会」、夏休みの「科学遊び教室」・「やきもの教室」、年1回行われる「図書館まつり」などは継続事業として親しまれています。

また、小・中学校との連携にも重点をおいています。昼休みを利用した有家町内の小学校5校への「読み語り訪問」や小・中学生対象の「創作絵本展」もそのひとつです。学校への団体貸出では、先生から依頼のあった図書館資料を図書館職員が選書し、学校用務員さんに届けてもらえるので、子ども達はいつも身近に本がある環境の中にいます。さらに、行政の活動にも積極的に参画しています。こども未来課事業の「ブックスタート」、商工観光課事業の「郷土のおはなし紙芝居制作」、教育委員会事業の「南島原市寺子屋21」・「高齢者教室」など、担当課との事前協議の上参画・協力と共に、広報活動も行っています。

おはなしの会「ちゅうりっぷ」は、図書館の力強いサポーターです。このボランティアグループとのお付き合いも10年が過ぎ“あ・うん”の呼吸でお互いの気持ちや役割が伝わる関係になりました。

南島原市には、5つの図書館と1つの図書室があり、定期的に館長会議や司書代表者を開催して、それぞれの情報を共有し、地域の図書館サービスの向上を目指しています。1人でも多くの子ども達が図書館を訪れてくれて、素晴らしい本との出会いを経験し、そして、この子ども達が大人になった時、また図書館を利用してもらえるよう、日々努力していきたいと思っています。



「お皿に絵をかこう」



有家町内小学校「読み語り訪問」の様子



長崎県読書グループ連絡協議会文化講演会（共催事業）

6月7日（月）に本館講堂において島原城資料館専門員の松尾卓次氏を招き、「歴史の町島原」と題して講演会を開催いたしました。

奈良時代初期の「肥前国風土記」にもその名が書かれているほど、古い歴史を持つ島原の文化や風土についてご講演いただき、島原の地の歴史の深さに参加者からは時折驚きと感嘆の声が上がっていました。

講演後には、質問の時間を予定していましたが、予定時間を過ぎてしまうほど参加者の皆さんからの質問があり、歴史のまち島原についてさらに興味をかき立てられるものとなったようで、大好評の内に終了いたしました。毎年テーマを替えて開催しておりますので、来年もどうぞご期待ください。



読書郵便集の取組紹介

長崎県教育委員会では、平成21年2月に「すべての子どもがいつでもどこでもみずから読書に親しむ環境づくりをめざして」、『第二次長崎県子ども読書活動推進計画』を策定いたしました。

※参考 URL : <http://www.manabi.pref.nagasaki.jp/dokusyo/index.html>



子どもの読書活動推進のための方策 － 6つの柱 －

- 子どもが読書に親しむ機会の提供と充実
- 子どもの読書環境の整備・充実
- 子どもの読書活動に関わる人材の育成
- 子どもの自主的な読書活動の推進
- 子どもの読書活動に関する理解と関心の促進
- 本県の特性に応じた子どもの読書活動の推進

これを受けて、本館では県内市町立図書館等と協力し、子どもの読書活動の推進のため、「子ども読書の日（4月23日）」や「こども読書週間（4月23日～5月12日）」における各種啓発活動の一助となるべく、『長崎県読書郵便集～この感動をあなたへ伝えたい』を発行し、各地の子ども読書活動推進イベント等で活用していただいているところです。（※過去に作成いたしました第1号および第2号ともに、好評をいただいております、本館のホームページからもご覧になることができます。（本館ホームページアドレス：<http://www.lib.pref.nagasaki.jp/>）

本取組を通して、本を心の栄養として子どもたちに生きる力を育ててもらい、出会った感動を同世代の子どもたちや大切な人へ伝える方法の1つとし、1人でも多くの子どもたちがこの冊子を手に取り、「本との出会い」の契機となればと考えております。また、子どもたちが読書で得られた感動を、一緒に感じていただければと思います。

◎『読書郵便』とは、友だちや大切な人に読んでもらいたい本を、郵便はがき形式で紹介したものです。



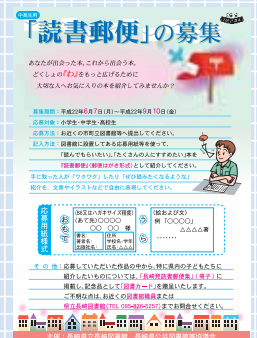
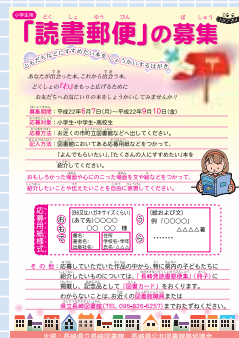
「読書郵便」作品募集

今年度も、県内市町立図書館等のご協力をいただき、右記チラシのように募集しておりますので、ふるってお近くの図書館へご応募ください。（お子様にもご案内ください。）多くの人の心に響く、心のこもった温かい作品をお待ちしています。

応募対象 県内の小・中・高校生

応募締切 9月10日（金）

問合せ・提出先 最寄の市町立図書館または県立長崎図書館まで
詳しくは県立長崎図書館ホームページをご覧ください。

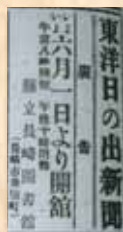


ーシリーズー 100年の歩み 1

1912年（明治45年）6月1日に県立長崎図書館が開館し、2012年（平成24年）に100周年を迎えるにあたり、「シリーズ100年のあゆみ」と題しまして、本館が歩んできた歴史についてご紹介していきます。

まず1回目となる今回は、当館の開館当初（明治・大正期）についてご紹介いたします。

県立長崎図書館は、明治44年の通常県議会で「図書館設置」について議決され、翌年の「県立長崎図書館規則」の公布を経て、長崎市新橋町1番地の県有家屋（現在の長崎市諏訪町にある「市立中央保育所」付近）を県立図書館として、明治45年6月1日に開館しました。当時の蔵書冊数は2,400冊で、開館初年度の利用状況は、1日平均閲覧人数239人と記録が残っています。



明治45年5月30日
東洋日の出新聞の開館告示の記事



明治45年6月2日
東洋日の出新聞
「図書館開始」の記事

開館当時は、利用者の図書への不足に対する関心が大きく、相次いで寄贈の申込があっていたようです。また、「本館八当分ノ間図書ノ携出ヲ許サズ」とあり、館内利用のみの運用面におきましても、蔵書不足に起因する措置でないかと容易に伺えます。（この措置は大正4年10月まで続けられています。）

大正4年には御大典（大正天皇ご即位の礼）記念事業として、諏訪公園内（現在地）の交親館（元県会議員兼迎賓館）を図書館に改修することになり、新天地での新たな船出をいたしました。この当時、本館は木造2階建て、書庫は鉄筋コンクリート3階建てでした。（大正4年11月25日竣工）



大正4年11月30日
東洋日の出新聞
「図書館開館式」の記事



新館（当時）写真

大正期の利用状況一覧

年 度	開館日数 (日)	館内利用人員 (人)	館外貸出利用人員 (人)	館外貸出利用冊数 (冊)
大正5年	321	135,447	26,688	32,398
大正8年	326	162,827	56,334	62,715
大正11年	327	204,702	132,012	147,789

催し物のご案内

「長崎ゆかりの文学展」企画展

（第2回）

内容：「原爆文学展」

（平成22年7月13日～9月5日）

（第3回）

内容：「子どもたちに夢を～長崎の児童文学～」

（平成22年9月23日～12月26日）

場所：県立長崎図書館4階郷土資料展示室

時間：9:30～17:00（ただし休館日を除く）

第21回県立長崎図書館講座

（平成22年度第3回）

日時：平成22年11月6日（土）13:30～15:30

場所：県立長崎図書館2階講堂

内容：国民読書年記念企画

対談「長崎の子ども本の作家たち

～黒崎義介・太田大八・福田清人・おおえひでを中心に～」

講師 二羽史裕 氏

（九州龍谷短期大学教授、児童文学研究家）

編集・発行 長崎県立長崎図書館 長崎市立山1丁目1番51号

ISSN 1344-5235 ホームページアドレス <http://www.lib.pref.nagasaki.jp>



この広報誌は、環境に配慮した再生紙を使用しています。